

「正信偈」について（第十六回）

正信偈の教え中 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による

てんじんぼ さろんちゅうげ

天親菩薩論註解

天親菩薩の「論」、註解して、

ほうど いんがけんせいがん

報土因果顕誓願

報土の因果、誓願に顕す。

おうげんえこう ゆ たりき

往還回向由他力

往・還の回向は他力に由る。

しょうじょうしいんゆいしんじん

正定之因唯信心

正定の因はただ信心なり。

わくぜんぼんぶしんじんほ

惑染凡夫信心発

惑染の凡夫、信心発すれば、

しょうちしょうじそくねはん

証知生死即涅槃

生死即涅槃なりと証知せしむ。

ひつしむりようこうみようど

必至無量光明土

必ず無量光明土に至れば、

しょうしゅじょうかいふけ

諸有衆生皆普化

諸有の衆生、みなあまねく化すと

いえり。

〔意訳〕

天親菩薩の「浄土論」に対する註解を作って、往生の原因と結果は、如来の誓願によることを顕かにされた。往相も還相も回向はいずれも阿弥陀仏の本願力である他力による。往生が確定する因は、ただただ信心である。

煩惱に汚れた凡夫であっても、信心が起こるならば、迷いがそのままで、迷いを離れた状態となることをはっきり示された。凡夫が必ず無量の光明が輝く浄土にいたるならば、穢土のあらゆる衆生をみな例外なく教化することができると教えられた。

印度の天親菩薩が「仏説無量寿経」の註釈「浄土論」を著されましたが、その「浄土論」に対して曇鸞大師が更に註釈されたのが「浄土論註」です。

そこでは、報土である阿弥陀仏の浄土が開設されることになった原因も、すでに開設されているという結果も、更には、私たちが浄土に往生することになる原因も、また私たちが間違いなく往生するという結果も、これはすべて阿弥陀仏の誓願によることである、と「浄土論註」に顕かにされた。

私たち凡夫が阿弥陀の浄土に往生する「往相」も、浄土に往生した上で、迷いのこの世間に対してはたらしかけられる「還相」も、どちらも、阿弥陀仏の本願力・他力によって回向されている(差し向けられている)。私たちが、間違いなく浄土に往生して仏に成ることが確定するのは、ただただ他力を阿弥陀仏の本願によって回向されている、他力の信心によることです。

真実を見失い、道理に迷い惑っていて、そのために心が純粹でなく汚染されている凡夫にも、信心が発すれば、すなわち信心が、阿弥陀仏の本願力によって、凡夫の身の上に起こることなのです。そうになると、迷い続けている惑染の凡夫に、本願による信心が起こるならば、迷いのままに間違いなく、浄土に往生させていただくことが、はっきりと思い知らされると示されています。

惑染の凡夫が、阿弥陀仏の本願によって、無量光明土、すなわち限りのない光が輝いている国土、つまり阿弥陀仏の極楽浄土、への往生を果たすならば(阿弥陀仏の往相回向)、やはり阿弥陀仏の本願によって迷いの世間に立ち戻り、あらゆる人びとを教化することになる(阿弥陀仏の還相回向)と、曇鸞大師は教えて下さっていると、親鸞聖人は曇鸞大師を讃えておられるのです。

「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし」

合掌